

各地で話題の病害虫

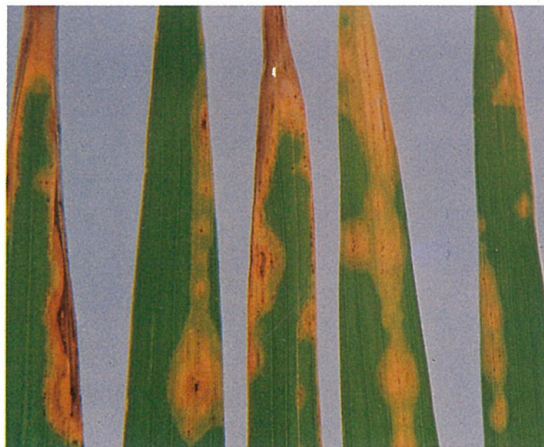
イネかさ枯病

学名: *Pseudomonas syringae* pv. *oryzae* Kuwata 1985

英名: bacterial halo blight

平成5年宮城県においてイネの葉身に黄色のかさ状病斑を生じる病害が発生した。この病斑部から菌の分離・同定を試みた結果、*Pseudomonas syringae* pv. *oryzae*によるイネかさ枯病であることが判明した。

本病は昭和58年青森県で初めて確認され、その後北海道でも発生が認められているが、宮城県での発生は初めてのことである



青森県農業試験場 桑田博隆氏提供

病徴は葉身に初め淡黄緑色でのちに黄色～黄褐色となるほぼ円形の病斑を生じる。また、病斑の中心部には褐点あるいは褐条が認められる。健全部との境界は明瞭であるが、病斑が多数形成された場合は融合しその先端が褐色に枯れ上がる。

被害は最高分けつ期に低温、多雨の条件で発生が助長されるものと思われる。病原菌の伝染経路については、種子伝染およびイネ科雑草からの伝染が考えられるが確証がなく、今後の研究が待たれる。

本病は分けつ期から幼穂形成期に発生するが、出穂期以降の発病は確認されておらず、現在のところ被害は出ていない。

クロフタモンマダラメイガ

学名: *Euzophera batangensis* Caradja

英名: persimmon bark borer

近年、東北地方のリンゴ産地で有袋栽培したリンゴの表面をなめるように食害された被害果がみられることがある。この被害は、これまでリンゴコカクモンハマキやナシヒメシンクイによるものと混同されていたが、最近の調査でクロフタモンマダラメイガであることが判明した。

本種は日本各地に分布し、カキやクリの枝幹害虫として知られ、成虫は開張13～18mm、灰色で白



青森県リンゴ試験場 川嶋浩三氏提供

色の斑紋がある。幼虫はリンゴ樹幹の粗皮と皮部の間や気根束部分（バーノット）の表面を縦横に食べる。また、胴腐らん病斑部も好んで食害する。終齢幼虫は体長13mm程度で、頭部はやや扁平で光沢のある茶褐色をしており、胴部は緑色を帯びた淡褐色である。青森県では年2～3回発生するが、夏期以降は発育のばらつきが大きく、世代間の重なりが見られる。有袋果への侵入は二次的なもので、通常の生息部位での密度が高くなったときや、夏期高温の場合に袋内に侵入する個体が多くなる。防除対策として、胴腐らん病の早期発見に努め治療すると共に樹幹の粗皮削りを励行すれば、幼虫密度は減少し、果実への被害はなくなる。

ショウガのいもち病

学名: *Pyricularia zingiberi* Nishikado

英名: blast

昭和63年頃、高知県の露地ショウガの根茎に黒い斑紋を生じる原因不明の病害が発見された。これを高知県農業技術センターが調査した結果、本病はショウガ及びミョウガのいもち病であることが判明した。

本病原菌の分生子は小型で、イネに対して寄生



高知県農業技術センター 古谷眞二氏提供

性がないことなどから、イネいもち病など他の *Pyricularia* 属菌とはかなり異なっている。

これまで、ショウガやミョウガの茎葉、葉身、鞘葉など葉の病害として知られていたが、ショウガの根茎に発生したのは初めてのことである。症状は、10月上・中旬から地表面へ露出した根茎で認められ、病斑の表面には黒色なめし皮状の菌核様構造物が形成され、品質が著しく低下する。

高知県下では、ショウガ植付け前に土壌消毒しているため、本病のショウガに対する第一次伝染源は近辺に存在するミョウガの罹病株であると推定されている。

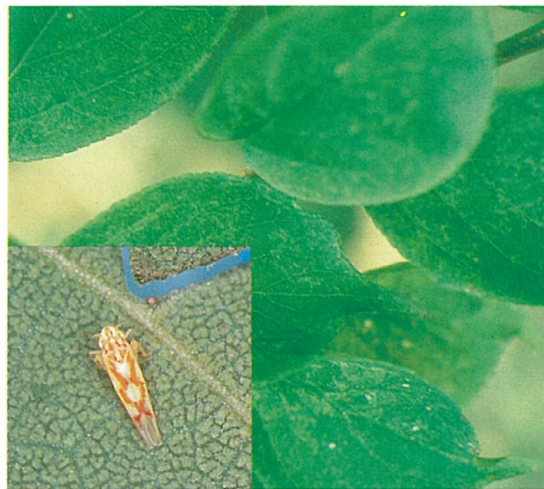
防除対策としては植付け前に土壌消毒すること。また、いもち病菌の感染時期と推定される9月中旬以降に、露出根茎を土壌で被覆すること。

防除薬剤としてジクロフルアニド水和剤やペノミル水和剤の散布が有効である。

ヤマシロヒメヨコバイ

学名: *Zygina yamashiroensis* Matsumura

平成6年夏、神奈川県の一部ウメ産地で、葉の表面が白くかすり状になる被害が発生した。本虫を埼玉大学の林正美氏に同定依頼したところ、ヤマシロヒメヨコバイであることが明らかになった。本種の寄主植物は、これまでクワが知られているが、ウメへの加害は初めてのことである。



神奈川県病害虫防除所 伊東祐孝氏提供

成虫は体長3mm内外、体色は全体的に黄白色を呈し、血紅色の斑紋が前胸背には縦に、前翅にはギザギザ状に連続してある。中には斑紋が不鮮明な個体もある。幼虫は体長1~3mmで、全体がうすい黄白色である。

成虫はウメの葉裏に静止するものが多いが、樹幹にも好んで止まる。寄生している葉に触れるとコナジラミのように舞い上がり、周辺を飛翔する。幼虫は葉裏に発見されるが、寄生密度は葉1枚に数頭程度となることが多いようである。

被害程度は均一でなく局所的で、葉裏に寄生する成虫と幼虫が吸汁によって、葉全体が白くかすり状になる。また、被害は新葉より枝元の古い葉に多く見られる。

防除対策については、現在登録農薬がないことから、今後の詳しい生態調査が待たれるところである。